

立教大学コミュニティ福祉研究所学術研究推進資金
企画研究プロジェクトⅡ(教員・学生参加型) 2018年度研究成果報告書

プロジェクト 学生代表者	学科・学年	氏名
	福祉学科・4年	石田結衣 印
指導教員	所属・職名	氏名
	コミュニティ福祉学部・教授	西田恵子 印
研究課題	都市部と地方部における多世代間交流と市民への情報発信に関する調査	
研究年度	2018年度	
プロジェクト 分担者	後藤南海 星野すみれ 宮本真衣	

プロジェクトの内容及び成果の概要

1.内容

都市部を「東京(谷中・巣鴨)」、地方部を「山形県高島町」と設定し、研究課題に基づき以下のことを実施した。

- (1)山形県高島町でのフィールドワーク(2018年11月27・28日、高島町地域包括支援センター、山形県立高島高校、高島町屋代地区公民館等)
- (2)谷中コミュニティセンターでのインタビュー(2019年3月21日、谷中コミュニティ委員橘光さん)
- (3)十文字高校(巣鴨)でのインタビュー(2019年3月28日、中高地歴公民科教員浜彰史先生)
- (4)SNSを使用した都市部・地方部に対するイメージを聞くアンケート(2019年3月10日、Instagram利用者100人に対して実施)

2.成果(私たちがとらえた課題と考察)

- (1)地域活動に関心を持ち、関わっている人が多い。
→過疎化・人口減少を起因とする若手の労働力不足や高齢化の現状を意識している人が多いのではないかと。
- (2)核家族化の進行・一人暮らしの増加により、多世代交流の機会が減少している。
→主体的に地域活動に参画していく人が必要なのではないかと。

(3)巣鴨という街の性質上、高齢者の数が多く頻繁に関わる機会があるが、高校をあげての地域貢献活動は行われていない。
→高校生のような若者世代が多世代交流に関心を持つためにはどのようにすればいいかと。
- (4)都市部・地方部に対する印象が偏っている。
→居住している地域以外の情報が限られているためか。

3.結論

- (1)高島高校の取り組みに地元の農家で職業体験をするというものがあった。都市部ではそれを行うのは難しいと考えられるので、既存の老人会や青年会、青年会と婦人会のように横のつながりを重視し、様々な年齢層が交流できる場を増やす。
- (2)若い世代が自分たちで企画・立案をし、地域のイベントを作る機会を用意する。一から作り出すことで地域についての理解を深め、地域自体を盛り上げることもつながる。
- (3)地域福祉教育として高校生向けに話す機会を設けることで若い世代に興味・関心を持ってもらう。
また都市部、地方部の高校生同士がそれぞれ赴いて体験をするなどプログラムを通じた交流を行う。
- (4)この調査は地方部と都市部を調べていく中でお互いにどういう印象を持っているのか気になり実施した。地方部と都市部で情報交換をすることで、相互利益が期待できる。